



Title	ブラジルとボリビアにおける沖縄系エスニックコミュニティと日本語
Author(s)	白岩, 広行; 森田, 耕平; 齊藤, 美穂 他
Citation	阪大日本語研究. 2011, 23, p. 1-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11043
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

正誤表

p.2 2.1.1 節 8 行目 「1964 年に移動・定着」 → 「1946 年に移動・定着」

ブラジルとボリビアにおける沖縄系エスニックコミュニティと日本語

Japanese language maintenance and shift within the Okinawan
communities in Brazil and Bolivia

白岩 広行・森田 耕平・齊藤 美穂・朴 秀娟・森 幸一・工藤 真由美
SHIRAIWA Hiroyuki・MORITA Kohei・SAITO Miho・
PARK Sooyun・MORI Koichi・KUDO Mayumi

キーワード：言語シフト、言語保持、2世、生活戦術、二重国籍

要旨

永住を目的とした戦後移住者を主な構成メンバーとする二つの沖縄系エスニックコミュニティ―ブラジルの都市エスニックコミュニティとボリビアの農村エスニックコミュニティ―を対象に言語生活調査を実施し、前者ではポルトガル語へのモノリンガル化が急速に進んでおり、後者では日本語が保持されるバイリンガルな状況にあることが多面的な調査項目から明らかになった。このような言語面での差異がどのような条件の違いに起因するのかは今後の詳細な分析を待たなければならないものの、2世に日本国籍を取得させることなく、都市部における自営業や技術・事務系職業によってブラジル日系人としての経済的社会的上昇を企図しているか、2世に日本・ボリビアの二重国籍を取得させつつ、ボリビア人を雇った大規模農業により経済的上昇を企図するか、といった両者が採用している生活戦術の違いと大きく相関していると現時点では解釈することができる。

1. はじめに

本稿では、ブラジルとボリビアにおける沖縄系エスニックコミュニティで実施した言語生活調査の一部を報告する。この二つのフィールドは、ブラジルの方はサンパウロ市における都市エスニックコミュニティであり、ボリビアの方はアマゾン源流地にある農村エスニックコミュニティであるという点で対照的である。

移動から約60年を経て世代交代が進行しているなか、日本語、沖縄方言、現地語であるポルトガル語やスペイン語に対して彼らがどのような使用意識や能力意識を有しているのか、そしてまた、これらの言語は彼らの生活戦術やアイデンティティとどのように関わっているのか、といった問題意識から言語生活調査は実施された。

今後精密な分析をすべき点は多々あるが、本稿ではそのための第一歩として、二つの沖縄系コミュニティにおける言語使用意識や言語能力意識の変容の一端を提示したい。

2. 言語生活調査の概要

まず、本節では、ブラジルとボリビアにおける二つのコミュニティの概要を述べた後、言語生活調査の内容を説明する。



【図1 調査地点】

2.1. 二つの調査地について

2.1.1. ブラジル サンパウロ市 ビラ・カロン地区

戦後移住者を中心として発展を遂げるようになったサンパウロ市東部に位置するビラ・カロン(Vila Carrão)地区には、本土系の日系人と沖縄系の日系人が居住している。居住者たちは「カロン」「ビラ・カロン」「カロン村」と呼称しているが、その地理的範囲は行政単位としての「カロン」とは必ずしも重なってはならず、その周辺行政区までを包含するものであり、ビラ・カロン地区に組織された二つの中核的なエスニック組織である ACREC (カロン文化体育協会) と AOVC (沖縄県人会ビラ・カロン支部) の会員の居住範囲を指す用語として用いられている。

沖縄系移民及びその子弟の移動と定着は、戦前に旧小禄村からブラジルに移民していた一家が1964年に移動・定着したのが嚆矢とされる。旧小禄村からのブラジル移民たちは当初、サンパウロ州内陸部のコーヒー農園にコロノ(農村賃金労働者)として導入されたが、戦後、本土日系移民と同様にサンパウロ市を中心とする都市部へと移動し、定着を遂げるようになったのである。

その後、同郷、同門中、親族関係などの基礎的社会関係を利用したチェーン・マイグレーションによって、現在では、約一千世帯の沖縄系家族が居住し、サンパウロ市最大の沖縄系人集住地域となっている。2006年度のAOVC会員世帯のうち世帯主の出身地の判明した421世帯に関してみると、那覇市出身が142世帯(33.7%)を占め圧倒的に多いが、その中でも140世帯までが旧小禄村(小禄・田原)出身者である。この意味でビラ・カロン地区は「ブラジルの小禄村」と呼ぶことも可能である。本調査の対象はこの「ウルクンチュ」の方々である。詳しくは工藤・森他(2009)を参照されたい。

なお、ビラ・カロン地区には沖縄系日系人、本土系日系人だけでなく、非日系人も混住しており、日常的に非日系人との接触がある。

2.1.2. ボリビア オキナワ第一移住地

ボリビアの国土は、ラパス(La Paz)を含む南西部をアンデス山脈が貫き、北東部にはアマゾン上流の平原が広がっている。オキナワ移住地は、東部平原地方の中核都市サンタクルス(Santa Cruz de la Sierra)から北東約40～90kmの地点にある三つの移住地(第一・第二・

第三移住地）から成る。本調査の対象は、移住地全体の中心である第一移住地の方々である。

オキナワ移住地建設の契機となったのは、第二次大戦での沖縄戦による壊滅的被害、戦後引き揚げ者の急増による人口増加及び米軍による軍事基地建設に伴う生産基盤の喪失などであり、1954年に第一次移民が入植した。その後、琉球政府による計画移民は1964年までおこなわれ、678世帯3229人が入植した。移住者の増加に伴い「オキナワ第二・第三移住地」が設立され、現在の沖縄系移民コミュニティは、ほとんど彼らとその子孫によって形成されている。主たる産業は大規模農業である。（なお、移住地への定着率が低く、アルゼンチン、サンパウロ、横浜市鶴見、沖縄への再移動も多く見られる。）

オキナワ移住地とは言っても、Camba（東部平原地方のインディオとスペイン人との混血）、Colla（アンデス高地からの移動者）などのボリビア人も多く住んでいる。経済的格差は大きく、一般的な関係は、雇用主＝日本人、農場労働者＝ボリビア人である。このように、沖縄系日系人は上下二重構造の上層にあり、両者は分離的居住の状況にある。

移住地生まれの2、3世であっても二重国籍で日本国民でもあるという点は、ブラジルなどの2、3世とは違う特筆すべき戦術である。成人した彼らの半数以上は日本への「デカセギ」経験（日本人として入国）を持っており、数年から、長い場合は十数年をデカセギ先で過ごし、そこで日本国内の日本語と長期的に接触する。

現在の第一移住地の小中学校（日ボ校）では、スペイン語と日本語による二元的教育体制に基づく教育が実施されている。日ボ校には高校課程がないために、中学課程卒業後、大多数の生徒は、移住地内にあるサンフランシスコ校やメトジスタ校高校課程ではなく、モンテローやサンタクルスなどの都市部の高校課程に下宿しながら（ないし寄宿舎に入って）通学するのが一般的である。しかし、大学に進学する者は相対的に少なく、高校卒業後は家業の農業経営に携わるか、「研修」と呼ばれるデカセギへと出かけるものが多い。

2.2. 言語生活調査について

2.2.1. 言語生活調査票の項目について

言語生活調査は、七十数項目から成るほぼ同一の調査票を両地点で使用した。概略は表1の通りである。ビラ・カロン地区の調査票に関しては工藤・森他（2009）を参照されたい。（表1：ボリビアのオキナワ移住地では、ポルトガル語がスペイン語になる。）

2.2.2. 言語生活調査の実施方法

調査はサンパウロ大学森幸一の指導のもとに、現地在住の調査員によっておこなわれた。調査の概要は表2の通りである¹⁾。（当然ながら都市部コミュニティの方が回収率は低い。）

【表 1 言語生活調査の項目】

	項目名		項目名
1	個人的属性1：社会的属性（全世代共通）	6	日本語能力・方言能力・ポルトガル語能力意識
2	個人的属性2：言語生活史（1世用／2世以下用）	7	日本語・方言教育意識
3	家庭での言語使用	8	訪日経験（デカセギ経験）と言語意識
4	メディア・娯楽と言語使用	9	コロニア語・方言をめぐる意識
5	職場・地域社会での言語使用		

【表 2 言語生活調査の概要】

調査地点名	カロン	オキ移
調査実施期間 ²⁾	2005 年 5 月～9 月	2007 年 7 月、8 月
調査対象者	調査地在住の旧小祿村出身者及び その子弟（ウルクンチュ）	オキナワ日本ボリビア協会の会員で 第一移住地に籍を持つ 288 名 ³⁾
無作為抽出の基礎データ	小祿・田原郷友会名簿に登録された 150 名	第一移住地の会員名簿に登録された 123 名
調査方法	調査票を用いた面接調査	
調査員	調査地在住の青年ウルクンチュ	オキナワ日本ボリビア協会・ 調査地在住の女性 7 名
調査票回収人数（総計）	87 名	107 名

2.2.3. 調査票が回収された対象者について

調査票が回収された対象者の性別・世代別人数の内訳は表 3 の通りである。

【表 3 調査対象者の性別・世代別分布】

	カロン			オキ移		
	男性	女性	計	男性	女性	計
1成	9	2	11	11	14	25
1子	4	7	11	4	8	12
2世	24	26	50	32	30	62
3世	4	11	15	5	3	8
合計	41	46	87	52	55	107

【表 4 2世対象者の生年別分布】

	カロン	オキ移
1930～1939	3	2
1940～1949	4	0
1950～1959	7	6
1960～1969	4	29
1970～1979	10	14
1980～1989	22	9
1990～1999	0	2
計	50	62

世代の区別は日本政府算定方式に従った⁴⁾。1 世は言語形成期を考慮して、12 歳を暫定的な基準とし、渡航時に 13 歳以上であった対象者を「成人移民(以下、「1 世成人）」」、12 歳以下であっ

た対象者を「子ども移民（以下、「1 世子ども」）」として二分類している。

表 3 からわかるように調査の性格上、世代ごとの人数分布を均一化することはできなかった。どちらの調査地でも 2 世の数が 6 割近くと最も多い。（なお、1 世成人ではオキナワ移住地の人数が、3 世ではビラ・カロン地区の人数が、それぞれ他方の倍程度となっている。）

さらに、同じ 2 世とは言っても、生年別の分布を見てみると、表 4 のように両地点とも幅広い年齢層から構成されている。これには、南米移民は「家族形態」での移民であって、1 世の中に子ども世代の移民が存在しているために、この子ども移民たちが成長し、結婚して誕生した子どもも 2 世となる、という点が関わっている。

ビラ・カロン地区では 2 世の約 4 割が 1980 年代生まれであるのに対し、オキナワ移住地ではほぼ同じ約 4 割が 1960 年代生まれとなっている。詳細な分析は今後の課題であるが、これらの調査地点における 2 世の生年分布の差異は、次のような事情を背景にして発生しているものと推定される。すなわち、オキナワ移住地の場合には、移住時期が 1954 年から 64 年のほぼ 10 年間に集中していた。そして、移住時の家族構成が、原始林伐採という開拓事業によって有利なように、労働力として期待できる、相対的に年齢の高い青年を数多く含み（移住家族の選択においてこうした点が考慮された）、これらの独身青年層が移住直後から結婚していったのである。一方、ビラ・カロン地区では 1953 年から 70 年代初頭まで戦後移住がおこなわれ、この形態で移住した子ども移民が結婚し独立する時期は相対的にオキナワ移住地よりも遅く、しかも戦後移住者には相当数の独身移住者が含まれており、これら独身移住者が結婚し家族を形成する時期もまたオキナワ移住地と比較すると、相対的に遅かったのである。

以上のことから、1 世において、成人移民と子ども移民をひとくくりにできないように、2 世もまたひとくくりにできないと考えた方がよいように思えるのだが、この点の分析がまだ十分にできないため、本稿では暫定的に対象者を絞って考察することとした（詳細は 2.2.4 節を参照されたい）。なお、1 世子ども移民は、ブラジル（ビラ・カロン地区）では「準 2 世」として、ボリビア（オキナワ移住地）では「準 1 世」という範疇で捉えられている。このため、以下の各地点についての記述では、それぞれの範疇で示すことにする。

2.2.4. 本稿における分析対象者について

以下の分析は、調査票を回収した対象者の中から、分析対象者を絞っておこなう。これは、同一世代の内部に見られる、年齢及びその背後にある社会的属性の多様性を考慮し、なるべくその世代を代表する対象者を中心に分析をおこなうためである。今回設けた基準としては、一つの世代を暫定的に 30 年の範囲に収まるものとし、その範囲から外れる対象者については分析の対象外とすることにした。（さらに、オキナワ移住地の場合には、1964 年の計画移民終了

後に個別に移民した例外的な対象者がいることもふまえ、渡航年も考慮することにした。）

以下に、調査票の回収された対象者と分析対象者の数を、世代と出生年で整理した表を挙げる（表 5～8）。上記の理由で分析の対象外とした人数を（ ）に入れて示す。

【表 5 1 世成人対象者の生年別分布】

	カロン	オキ移
1910～1919	(1)	0
1920～1929	1	5
1930～1939	4	13
1940～1949	4	4
1950～1959	(1)	(1)
1960～1969	0	(2)

【表 6 1 世子ども対象者の生年別分布】

	カロン	オキ移
1940～1949	2	2
1950～1959	8	10
1960～1969	0	0
1970～1979	0	0
1980～1989	0	0
1990～1999	(1)	0

【表 7 2 世対象者の生年別分布】

	カロン	オキ移
1930～1939	(3)	(2)
1940～1949	(4)	0
1950～1959	(7)	(6)
1960～1969	4	29
1970～1979	10	14
1980～1989	22	9
1990～1999	0	(2)

【表 8 3 世対象者の生年別分布】

	カロン	オキ移
1950～1959	(1)	0
1960～1969	(1)	0
1970～1979	(3)	0
1980～1989	10	4
1990～1999	0	4

以上をまとめて、今回の分析の対象者を世代ごとに整理すると表 9 のようになる⁵⁾。

【表 9 分析対象者の世代別分布】

	1成	1子	2世	3世	合計
カロン	9	10	36	13	68
オキ移	21	12	52	8	93

3. 1970 年代生まれの 2 世の分析

本稿では、上述のように対象者の世代と生年をそろえて分析をおこなうが、両地点の全体像を見ていく前に、まず、1970 年代生まれの 2 世に限定して比較分析を試みる。対象となる 1970 年代生まれの 2 世は、ビラ・カロン地区が 10 名（男性 4 名、女性 6 名）、オキナワ移住地が 14 名（男性 5 名、女性 9 名）である。

3.1. 言語接触のあり様

言語接触のあり様について調査するために、ビラ・カロン地区の調査票では、次の選択肢を設定して、使用言語を尋ねた。(表 10：ボリビアのオキナワ移住地では、ポルトガル語がスペイン語になる)。

【表 10 使用言語の選択肢】

1	日本語のみ	5	方言のほうが多い	9	方言とポルトガル語半々
2	方言のみ	6	ポルトガル語のほうが多い	10	三言語すべて
3	ポルトガル語のみ	7	日本語と方言半々	11	その他（記述式で回答）
4	日本語のほうが多い	8	日本語とポルトガル語半々		

その結果、9「方言とポルトガル語半々」はごく少数であった。これはボリビアのオキナワ移住地に関しても同様に「方言とスペイン語半々」という回答はほとんどなかった。

そこで、以下の分析では、1と4をまとめて「主に日本語」、2と5をまとめて「主に方言」、3と6をまとめて「主に現地語」と整理し、「主に方言」「方言日本語半々」「主に日本語」「日本語現地語半々」「主に現地語」、「三言語併用」として提示することにする。

なお、言語生活調査の後に談話録音を実施した。録音した談話を分析していくと、白岩他(2010)、工藤他(2010)で示したように、「日本語」と意識されていたとしても、ウチナーヤマトウグチ的な混交性が見られる。従って、本稿で分析するのはあくまでも「意識」である。また、ビラ・カロン地区では「ブラジル語」という言い方がされることが多いようだが、本稿では「ポルトガル語」としている。

3.2. 社会的特徴の比較

大局的には以下の二点において大きく異なっている。

第一に、職業と学歴（移住地での通学経験）が異なる。まず職業に関しては、ビラ・カロン地区では商業（自営業）あるいは技術・事務職が主であるのに対し、オキナワ移住地ではほとんどが農業に従事している（表 11）。

学歴については、ビラ・カロン地区ではほとんどが大学への通学経験があるのに対し、オキナワ移住地では「中等教育課程」までがほとんどである（表 12）。なお、ボリビアでは日本の高校課程を中等教育課程と呼んでいることに留意されたい。こうした学歴の差が存在している背景には、次のような事情が関わっている。ビラ・カロン地区では、自営業型経済安定上昇戦略を基本としながら、①公立学校における学費無料、②昼間部と夜間部という二部制をとっており両者に対する社会的評価の差がないこと、③家業であるがゆえに家族労働力投下に対して柔軟性があったこと、などを背景に高学歴取得による社会的経済的成功をも並行してめざして

いた。一方、オキナワ移住地では、生産基盤としての農地を保有していたこと、伝統的に上下二層の社会構造であり中間層が脆弱であることもあって、高等教育を受けることによるメリットがほとんど存在しなかったのである。少なくともボリビア人労働者に指示を与え、銀行などとの対外的な交渉が可能であればいいという認識が強固だったと考えられる。

【表 11 職業】

カロン		オキ移	
商業（自営業）	6	専業農家	8
技術職	3	兼業農家	4
事務職	1	農業以外	0
		賃金労働	2

【表 12 移住地での通学経験と学歴】

	カロン	オキ移
初等教育（小学校）	0	0
中等教育（中学校・高校）	2	11
高等教育（大学）	8	0
無回答	0	1
通学経験なし	0	2

第二に、ビラ・カロン地区ではほとんどがブラジル国籍であるのに対し、オキナワ移住地では日本とボリビアの二重国籍である（表 13）。この違いは、訪日経験の有無や期間の長短とも関係し、オキナワ移住地では「研修」と呼ばれる訪日経験がある対象者がほとんどである（表 14）。一方は「ブラジル人」として、他方は「日本人」として訪日することになるのであるが、このことは、あくまで「（日系）ブラジル人」としてブラジルでの成功をめざすのか、日本国民としての「成長（文化化）」と同時にボリビアでの経済的成功をめざすのかという両者の生活戦術の目標とも密接に関連しているように思われる。

【表 13 国籍】

	カロン	オキ移
日本	0	1
ブラジル／ボリビア	9	1
二重国籍	1	11
その他	0	1

【表 14 訪日経験】

	カロン	オキ移
訪日経験あり	5	11
訪日経験なし	5	2
無回答	0	1

【表 15 日本語学校通学経験】

	カロン	オキ移
通学経験あり	8	12
通学経験なし	1	2
無回答	1	0

なお、日本語学校の通学歴の有無については、表 15 のようにどちらの移住地でもほとんどが「ある」と答えており、一見差がないように見える。しかし、オキナワ移住地の日本語教育に関しては、ボリビアの公教育と並行して半ば義務的におこなわれてきたことに注目する必要がある。このことは両者の日本語教育の時間や質などとも関わっており、例えば日本語教育の時間だけを見れば、ビラ・カロン地区では 1 週間に 2 日ないし 3 日、それも 1 回 2 時間程度であるのに対して、オキナワ移住地では毎日 3～4 時間程度の日本語授業が実施されているといった違いに明瞭に表れている。このことはオキナワ移住地の場合、日ボ校（2.1.2 参照）卒業時までに大半が日本語能力試験で 2 級を取得するのに対して、ビラ・カロン地区では 3 級取得も困

難という事実にも反映している。

3.3. 言語使用についての意識

以上のような社会的な特徴の違いは、言語使用意識や言語能力意識の違いと相関していると思われる。

【表 16 家族全員揃った時の言語】

まず、家族全員揃った時の使用言語については、ビラ・カロン地区では「主に現地語（主にポルトガル語）」に回答が集中するのに対し、オキナワ移住地では、「主に日本語」と「日語現地語半々（日本語スペイン語半々）」とが同じ割合となっている（表 16）。同世代（兄弟や友人）間でも、ビラ・カロン地区では「主に現地語」が中心であるのに対し、オキナワ移住地では、「日語現地語半々」が最も多く、ビラ・カロン地区の回答には見られない「主に日本語」という回答も見られる（表 17）。

	カロン	オキ移
主に方言	0	0
方言日語半々	0	1
主に日本語	0	4
日語現地語半々	2	4
主に現地語	7	1
三言語併用	0	2
方言現地語半々	1	0
無回答	0	2
合計	10	14

【表 17 同世代と話す時の言語】

	対兄弟				対友人			
	話しかける		話しかけられる		本土系の友人		沖縄系の友人	
	カロン	オキ移	カロン	オキ移	カロン	オキ移	カロン	オキ移
主に方言	0	0	0	0	0	0	0	0
方言日語半々	0	0	0	0	0	0	0	0
主に日本語	0	2	0	2	0	5	0	2
日語現地語半々	1	5	0	5	0	4	1	5
主に現地語	9	2	9	2	10	4	7	4
三言語併用	0	2	0	2	0	0	1	3
方言現地語半々	0	0	1	0	0	0	0	0
その他（複数回答等）	0	0	0	0	0	0	1	0
無回答	0	3	0	3	0	1	0	0
合計	10	14	10	14	10	14	10	14

【表 18 親と話す時の言語】

	対父親				対母親			
	話しかける		話しかけられる		話しかける		話しかけられる	
	カロン	オキ移	カロン	オキ移	カロン	オキ移	カロン	オキ移
主に方言	0	0	0	1	0	0	0	1
方言日語半々	0	1	1	1	0	2	1	2
主に日本語	0	6	1	6	1	7	0	6
日語現地語半々	2	2	2	1	1	2	3	3
主に現地語	8	0	4	0	7	1	3	0
三言語併用	0	1	1	1	1	1	2	1
方言現地語半々	0	0	1	0	0	0	1	0
無回答	0	4	0	4	0	1	0	1
合計	10	14	10	14	10	14	10	14

うが高い自己評価をしている。「読める」「書ける」になるとその傾向が顕著で、ビラ・カロン地区では「まったく」できないという回答が半数以上であるのに対して、オキナワ移住地では、できるという回答が中心である。

現地語に関しては、基本的にどちらも「よく」できるとの回答が多いが、ビラ・カロン地区に比べて、オキナワ移住地では「書ける」に関する自己評価が低い。

以上のことから、言語使用意識とも共通して、ビラ・カロン地区は現地語の能力の評価が総じて高く、オキナワ移住地では日本語能力の評価が総じて高いと言える。

3.5. まとめ

限られた人数ではあるものの、70年代生まれの2世を比較することによって、現地語へのモノリンガル化が進んでいるか否かの違いが見えてきた。この違いは、二重国籍であるか否か（日本国籍の有無）という帰属意識の違い、職業・学歴という生活戦術の違いと相関している。では、全世代を見ていった場合、両コミュニティにおける様相はどのようになるであろうか。以下、ビラ・カロン地区、オキナワ移住地の順に述べる。

4. ブラジル サンパウロ市 ビラ・カロン地区の場合

第4節では、ビラ・カロン地区の1世成人から3世までの調査結果を示す。2世を中心に述べていくが、1世成人移民、1世子ども移民（準2世）、3世の状況との関係にも言及し、変化の方向性を探る。結論を先取りして言えば、都市沖縄系コミュニティであるビラ・カロン地区では、概略次のような変化が見られる。（2世と3世の間には言語面での大きな差はない。）

	1世成人 →→	1世子ども（準2世） →→	2世 →→	3世
	日本国籍 商業	日本国籍 商業	ブラジル国籍 商業・事務・技術職(高学歴)	
日本語	○	○	×	×
沖縄方言	○	△	×	×
ポルトガル語	△	○	○	○

4.1. 社会的特徴

世代別の生年は、表20に示したような分布となっているが、1世は1名を除いて1950～60年代に渡航した戦後移民であり（表21）、ほとんどが渡航時に「永住」を企図していた（表22）。

また1世は1名を除き、沖縄県那覇市小禄の出身者であるが（表23）、2世、3世の出身地は基本的にサンパウロ州内であり、ビラ・カロン地区出身者はそのうちの半数程度である（表24）。また、既婚者を見ると、多くはウルクンチュ同士で結婚している（表25）。

【表 20 世代別生年分布】

	1成	1子	2世	3世
1920年代	1			
1930年代	4			
1940年代	4	2		
1950年代		8		
1960年代			4	
1970年代			10	3
1980年代			22	10
合計	9	10	36	13

【表 21 渡航年代】

	1成	1子
1940年代	1	0
1950年代	5	5
1960年代	3	5
合計	9	10

【表 22 渡航時の予定】

	1成
永住	7
一時	1
未定	1
合計	9

【表 23 1世の出身地】

	1成	1子
那覇市小禄	8	9
南城市（旧玉城）	1	0
無回答	0	1
合計	9	10

【表 24 2世・3世の出身地】

	2世	3世
ビラ・カロン地区	18	5
サンパウロ州内（ビラ・カロン地区以外）	11	5
無回答*	7	3
合計	36	13

*出生地を詳細に記していない（「サンパウロ州内」のみ等）ものも含む。

【表 25 婚姻の有無と配偶者の属性】

	1成	1子	2世	3世
未婚	2	0	28	11
既婚：ウルクンチュ	6	5	4	2
既婚：ウチナンチュ（小禄以外）	1	1	3	0
既婚：本土日本人	0	0	1	0
既婚：混血	0	0	0	0
既婚：非日系	0	0	0	0
無回答	0	4	0	0
合計	9	10	36	13

国籍については、世代により違いが見られる（表26）。1世は日本国籍であるが、2世以下は基本的にブラジル国籍であり、日本とブラジルの二重国籍をもつものはごくわずかである。2世に対して日本国籍を取得させることはなく、ブラジルでの社会的経済的な成功が目標とされたことがわかる。

職業については、1世では基本的に「商業（自営業）」であるが、2世、3世になると、「専門・技術職」「管理・事務職」（「学生」）との回答が見られ、ホワイトカラー・テクノクラートとし

ての社会的上昇を遂げてきていることがうかがえる（表 27）。

【表 26 国籍】

	1成	1子	2世	3世
日本	9	10	0	0
ブラジル	0	0	34	13
二重国籍	0	0	2	0
合計	9	10	36	13

【表 27 職業】

	1成	1子	2世	3世
専門・技術職	0	0	5	0
管理・事務職	0	0	2	2
商業・販売	7	10	18	4
学生	0	0	6	5
その他（複数職兼業を含む）	1	0	2	0
無回答	1	0	3	2
合計	9	10	36	13

4.2. 言語使用についての意識

本節では、言語使用意識に関する調査結果を、家族内の場合、日系団体及び友人の場合、仕事の場合という使用場面ごとに分けて見ていく。ビラ・カロン地区の全体的な傾向は、ポルトガル語へのシフトである。

4.2.1. 家族内の場合

表 28 に示したように、2 世では家族全員揃った時の使用言語は、「主に現地語」とする回答が有効回答中 60 % を占め、「三言語併用」が 17 % でこれに次ぐ。「主に日本語」は 8.5 %、「主に方言」「方言日語半々」は「0」と、現地語を中心とした使用状況であることがわかる。ポルトガル語を交えた言語使用状況は 1 世の回答にも見られるが、1 世成人では「主に方言」という回答があるのに対し、1 世子ども（準 2 世）ではそれがなくなり、「三言語併用」が過半数を占める。2 世以下では「三言語併用」の比率が下がり、3 世では「主に現地語」が大半である⁷⁾。

次に、おおよそ同世代と考えられる、配偶者及び兄弟と話す時の結果を表 29 に示す（2 世以下は未婚の者が多く、1 世では兄弟姉妹について無回答が多いため、配偶者については 1 世の結果のみ、兄弟については 2・3 世の結果のみを示す）。また、表 30 には、父親・母親、表 31 には子どもと話す時の言語についての結果を示す。

これらの表から、2 世については次のことが言える。

- ・同世代である兄弟に対しては、「主に現地語」を用いる（97%）。
- ・親に対しても、「主に現地語」が対父親で 71 %、対母親で 61 % を占め、現地語の使用が

【表 28 家族全員揃った時の言語】

	1成	1子	2世	3世
主に方言	2	0	0	1
方言日語半々	0	0	0	0
主に日本語	0	0	3	0
日語現地語半々	2	1	2	1
主に現地語	2	2	21	6
三言語併用	3	6	6	2
方言現地語半々	0	1	2	0
その他（複数回答等）	0	0	1	3
無回答	0	0	1	0
合計	9	10	36	13

中心と言える。「主に日本語」「日語現地語半々」がそれぞれ1割前後見られることから、日本語の使用は少し保持されていると言えるが、沖縄方言は、2世自身が話しかける際にはほぼ使用されない。

【表 29 同世代と話す時の言語】

	対配偶者				対兄弟			
	話しかける		話しかけられる		話しかける		話しかけられる	
	1成	1子	1成	1子	2世	3世	2世	3世
主に方言	1	0	2	0	0	0	0	0
方言日語半々	1	0	0	1	0	0	0	0
主に日本語	1	0	1	0	0	0	0	0
日語現地語半々	1	3	1	3	1	0	0	0
主に現地語	0	0	0	1	35	11	35	11
三言語併用	2	5	2	3	0	0	0	0
方言現地語半々	0	1	0	1	0	0	1	0
無回答	3	1	3	1	0	2	0	2
合計	9	10	9	10	36	13	36	13

【表 30 親と話す時の言語】

	対父親				対母親			
	話しかける		話しかけられる		話しかける		話しかけられる	
	2世	3世	2世	3世	2世	3世	2世	3世
主に方言	0	0	0	0	0	0	0	0
方言日語半々	1	0	1	0	1	0	1	0
主に日本語	4	0	3	0	3	0	1	0
日語現地語半々	4	1	4	2	4	1	8	1
主に現地語	25	12	22	11	22	11	14	11
三言語併用	0	0	2	0	3	0	8	1
方言現地語半々	1	0	3	0	1	1	3	0
その他(複数回答等)	0	0	0	0	2	0	1	0
無回答	1	0	1	0	0	0	0	0
合計	36	13	36	13	36	13	36	13

他の世代については母数が少ないため、さらなる調査が必要となるが、次のような傾向がある。まず1世については次の点が挙げられ、2世の示す傾向は、1世子ども移民(準2世)の世代から現れてきていることがわかる。

- ・ 配偶者と話す場合、1世成人では回答が分散しているが、1世子ども(準2世)では「三言語併用」「日語現地語半々」のように、現地語を交えた使用が多くなっている。方言を主に使用するのは1世成人の中でもごく一部となっている。

【表 31 子どもと話す時の言語】

	話しかける		話しかけられる	
	1成	1子	1成	1子
主に方言	1	0	1	0
方言日語半々	0	0	0	0
主に日本語	0	0	0	0
日語現地語半々	2	3	2	0
主に現地語	2	3	3	8
三言語併用	2	2	0	0
方言現地語半々	0	1	0	1
無回答	2	1	3	1
合計	9	10	9	10

- ・子どもに話しかける時には、1 世成人・子ども移民（準 2 世）ともに、やはり日本語と方言に現地語を交えた使用となるが、自分の子どもから話しかけられる場合には、1 世子ども（準 2 世）において「主に現地語」へのシフトが顕著に見られる。

3 世では、相手が兄弟であろうと親であろうと「主に現地語」と回答されており、「現地語」のみへのモノリンガル化が鮮明に表れている。

以上のことから、ビラ・カロン地区の家族内では、ポルトガル語を中心とする言語使用状況となっていると考えられる。

4.2.2. 日系団体及び友人の場合

本節では日系団体の集まりや友人との会話における言語使用意識の結果を見るが、その前に、地域の日系の集まりへの参加状況を確認しておく（表 32）。ビラ・カロン地区の場合は、後述のオキナワ移住地と異なり、日系団体への参加は任意である。また、表 33 に示したように、ほとんどの者に日系人の友人がおり、今回は結果の提示を省略したが、その中には沖縄系の友人が含まれるとほぼすべてが回答している。

【表 32 日系の集まりへの参加の有無】

	1成	1子	2世	3世
参加する	4	6	20	10
参加しない	5	3	15	3
無回答	0	1	1	0
合計	9	10	36	13

【表 33 日系人の友人の有無】

	1成	1子	2世	3世
主に日系人	6	8	29	8
半々	2	2	2	2
主に非日系人	0	0	5	1
友達いない	1	0	0	1
無回答	0	0	0	1
合計	9	10	36	13

表 34 に、日系団体の集まり、沖縄系の友人、本土系の友人と話す時の使用言語を示す。

【表 34 日系団体及び友人との会話における使用言語】

	地域日系の集まり				対沖縄系の友人				対本土系の友人			
	1成	1子	2世	3世	1成	1子	2世	3世	1成	1子	2世	3世
主に方言	2	1	0	0	6	1	0	0	0	1	0	0
方言日本語半々	0	0	0	0	1	1	0	0	2	0	0	0
主に日本語	0	0	2	0	0	0	1	0	4	0	1	0
日本語現地語半々	0	1	4	1	0	3	3	1	2	7	2	1
主に現地語	1	1	14	7	0	0	28	11	1	1	33	11
三言語併用	1	3	0	0	1	4	1	0	0	0	0	0
方言現地語半々	1	1	0	2	1	1	0	0	0	1	0	0
その他(複数回答等)	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0
無回答	4	3	16	3	0	0	1	1	0	0	0	1
合計	9	10	36	13	9	10	36	13	9	10	36	13

2 世については次のことが言える。

- ・日系団体の集まりでも、「主に現地語」という回答が有効回答の 70%と主流である。
- ・相手が「沖縄系の友人」「本土系の友人」の場合でも、「主に現地語」の占める割合がそれぞれ 80%、92%となる。「日語現地語半々」が 1 割にも満たないことから、日本語を交えることは少ないと言える。

他の世代の結果を見てみると、1 世の場合、日系の集まりについての回答は分散しているが、沖縄系の友人が相手の場合、成人移民では 9 名中 6 名が「主に方言」と答え、他の回答もすべて方言を含むものである。子ども移民（準 2 世）では、「三言語使用」「日語現地語半々」が主となり、「主に方言」と回答したのは 1 名のみとなる。本土系の友人が相手の場合には、成人移民では「主に日本語」を中心に回答が分布するのに対し、子ども移民（準 2 世）の場合には「日語現地語半々」に回答が集中している。

3 世では、「主に現地語」が中心となっており、特に友人との会話においては、2 世に見られた傾向が、より鮮明になっている。

以上のように家族以外の日系人との交流においてもポルトガル語へのシフトが見られる。

4.2.3. 仕事の場合

三言語それぞれについて、仕事上使用するか否かを尋ねた結果を表 35 に示す。2 世では、ポルトガル語については「使う」が 92%を占めるが、沖縄方言と日本語については、それぞれ 94%、81%が「使わない」と答えている⁹⁾。

世代ごとに見ると、ポルトガル語は 1 世成人から使用されている。沖縄方言については、1 世成人では「使う」と「使わない」が 2 対 1 の比率であるが、1 世子ども（準 2 世）では 1 対 1 と均衡し、2 世・3 世では「使わない」が主となる、というように世代が下がるごとに使わなくなる。日本語については、1 世成人では「使う」「使わない」が 1 対 2 で、「使わない」とする回答が多い。1 世子ども（準 2 世）では 4 対 1 で「使う」が優勢となっているが、2 世以下では「使わない」が主となっている。

【表 35 仕事上の各言語の使用状況】

	方言				日本語				ポルトガル語			
	1成	1子	2世	3世	1成	1子	2世	3世	1成	1子	2世	3世
使う	4	4	2	2	2	8	7	2	5	9	33	11
使わない	2	4	34	11	4	2	29	11	1	0	3	1
その他(退職等)	1	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0
無回答	2	2	0	0	1	0	0	0	2	1	0	1
合計	9	10	36	13	9	10	36	13	9	10	36	13

4.3 言語能力についての意識

本節では、言語能力についての意識を尋ねた結果を、2世を中心にまとめる。表36は、方言、日本語、ポルトガル語それぞれの、「聞ける」「話せる」「読める」「書ける」の四技能について、使用場面ごとにその能力に対する自己評価を問うた結果を示したものである。

まず沖縄方言についての回答を見ると、2世では、「聞ける」「話せる」のいずれにおいても「よく」とできると回答する人はほとんど見られない。「聞ける」では「だいたい」または「少し」とできると回答に集中しており、「話せる」では「まったく」できないという回答が多く見られる。全世代を通して見ると、1世成人ではすべての回答者が「よく」とできるとしており、1世子ども（準2世）以下、世代が下がるほど沖縄方言の言語能力評価は下がってきている。

日本語能力に関しても2世の自己評価はそれほど高くなく、「読める」「書ける」になると、すべての場面において、「まったく」できないという回答がもっとも多い。「聞ける」「話せる」においても、「日常会話」「家庭での話」「あいさつ」といった場面を除くと、能力意識は下がる。1世成人では、四技能すべてにおいて、「まったく」できないという回答は見られないが、1世子ども（準2世）以下で自己評価が下がってきており、「読める」「書ける」では、1世子ども（準2世）からすでに「まったく」できないという回答の占める率が高くなっている。

一方、ポルトガル語の場合、沖縄方言や日本語の場合とは反対に、2世の自己評価は高い。四技能すべてにおいて、どの場面についても、もっとも多い回答は「よく」とできるというものである。ポルトガル語能力に対する意識では、世代が下がるほど自己評価が高くなるが、1世成人でも、「話せる」「聞ける」に限って言うと、「まったく」できないと回答する人は少ない。ビラ・カロン地区の場合、世代を通してポルトガル語能力に対する自己評価は高い傾向にある。（ただし、1世成人では、「書ける」については自己評価が低い。）

次に、言語能力意識と関係するメディアの利用状況を示しておく。調査では、日本語を用いた媒体と現地語を用いた媒体について、それぞれどのぐらいの頻度で見たり読んだりするかを尋ねたが、ここではテレビ・ビデオと新聞に関する回答結果を表37、38に示す。

表37、38から2世について、以下のことがわかる。

- ・日本のビデオは「ほとんど」あるいは「まったく」見ないと58%が答えているのに対し、現地のテレビ番組については、97%が「よく」または「ときどき」見ている。
- ・日本語の新聞は94%が「ほとんど」あるいは「まったく」読まないと答えているが、ポルトガル語の新聞は、92%が「よく」または「ときどき」読むと回答している。

この結果は、2世における、日本語能力及びポルトガル語能力についての意識と連動していると言えるであろう。3世についてもほぼ同様である。

【表 36 言語能力についての意識】⁹⁾[illegible]

【表 37 テレビ・ビデオを見る頻度】

	日本のビデオ				NHK				現地のテレビ番組			
	1成	1子	2世	3世	1成	1子	2世	3世	1成	1子	2世	3世
よく	2	1	4	2	5	3	5	1	7	7	27	9
ときどき	4	3	11	3	0	0	7	3	1	2	7	4
ほとんど(ない)	1	6	17	4	0	3	11	2	0	0	0	0
まったく(ない)	2	0	4	4	4	4	13	7	1	0	1	0
無回答	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
合計	9	10	36	13	9	10	36	13	9	10	36	13

【表 38 新聞を読む頻度】

	日本語の新聞				ポルトガル語の新聞			
	1成	1子	2世	3世	1成	1子	2世	3世
よく	4	0	1	0	3	4	20	7
ときどき	0	0	1	0	0	2	13	6
ほとんど(ない)	1	3	2	0	0	3	3	0
まったく(ない)	3	6	31	13	6	1	0	0
無回答	1	1	1	0	0	0	0	0
合計	9	10	36	13	9	10	36	13

世代を追って見ると、このような日本語の媒体利用の減少は、1 世子ども（準 2 世）の世代から確認できる。1 世成人では、日本のビデオを「よく」あるいは「ときどき」見るという人が優勢であるが、1 世子ども（準 2 世）では「ほとんど」見ないという人が過半数を占めている。日本語の新聞についても同様で、1 世成人世代では、半数が「よく」見ると答えているが、1 世子ども（準 2 世）では、有効回答のすべてが「まったく」あるいは「ほとんど」見ないとなっている。この利用状況の違いは、特に読み書き能力についての意識における 1 世成人と 1 世子ども（準 2 世）の結果の違いと相関している。

一方、ポルトガル語の方は、テレビに関しては 1 世成人世代から変わらず、基本的に「よく」見るという回答が主流である。しかし、新聞については、1 世成人では「まったく」読まないが主流であったものが、1 世子ども（準 2 世）では「よく」あるいは「ときどき」読むという回答が過半数を占めるようになってきている。1 世成人と 1 世子ども（準 2 世）におけるポルトガル語能力意識の違いも、この状況と連動していると考えられる。

5. ボリビア オキナワ移住地の場合

第 5 節では、ボリビアのオキナワ移住地における、1 世成人移民から 3 世までの調査結果を示す。ここでも、人数の多い 2 世を中心に述べていくが、1 世成人移民、1 世子ども移民（準 1 世）、

3世の状況にも言及し、変化の方向性を探る。結論を先取りして言えば、農村沖縄系コミュニティであるオキナワ移住地では、概略次のような状況となっている。

	1世成人 →→ 1世子ども（準1世） →→ 2世 →→ 3世			
	日本国籍 農業	日本国籍 農業	日本・ボリビア二重国籍 農業	
日本語	○	○	○	○
沖縄方言	○	△	△	×
スペイン語	△	○	○	○

5.1. 社会的特徴

分析対象者の生年分布は表 39 に示す通りである。1世の渡航年は 1950～60年代と、ビラ・カロン地区の対象者とはほぼ同じである（表 40）。渡航時に全員が「永住」を企図していた（表 41）。この点はビラ・カロン地区を含めた戦後移民の特徴である。

【表 39 生年】

	1成	1子	2世	3世
1920年代	5			
1930年代	13			
1940年代	3*	2		
1950年代		10		
1960年代			29	
1970年代			14	
1980年代			9	4
1990年代				4
合計	21	12	52	8

*渡航年代が遅いために1名除いている。

【表 40 渡航年代】

	1成	1子
1950年代	14	5
1960年代	7	7
合計	21	12

【表 41 渡航時の予定】

	1成
永住	21
一時	0
未定	0
合計	21

【表 42 1世の出身地】

	1成	1子
沖縄本島北部	4	5
沖縄本島中南部	9	6
その他（サイパン・フィリピン）	3	0
無回答	5	1
合計	21	12

【表 43 2世・3世の出身地】

	2世	3世
オキナワ移住地	39	4
アルゼンチン	3	0
ブラジル	1	0
日本（両親デカセギ中）	0	4
無回答*	9	0
合計	52	8

*出生地を詳細に記していない（「ボリビア国内」のみ等）ものも含む。

表 42 に示したように、1 世には沖縄本島のさまざまな地域の出身者がいる。(調査では市町村名まで回答を求めたが、ここでは大きく北部・中南部に分けてその結果を示す。なお、分析対象者に小禄出身者はいない。)

2 世は、表 43 に示すように、その大半がオキナワ移住地出身である。3 世は、オキナワ移住地生まれと、両親のデカセギ先である日本生まれが半々となっている。また、ウチナンチュ同士の結婚が多い(表 44)。

【表 44 婚姻の有無と配偶者の属性】

	1成	1子	2世	3世
未婚	0	0	9	8
既婚:ウチナンチュ	21	11	30	0
既婚:本土日本人	0	0	3	0
既婚:混血	0	0	1	0
既婚:非日系	0	1	5	0
無回答	0	0	3	0
合計	21	12	51*	8

*他に、配偶者の属性として、「ウチナンチュ」「本土日本人」の両方を選択した回答者がいたが、集計から外した。

国籍を見ると、ビラ・カロン地区との違いが浮かび上がる。1 世が日本国籍であるのは同様だが、2 世以下が基本的に日本とボリビアの二重国籍である点が大きく異なる(表 45)。ボリビアでは、2 世以下でも日本国籍を維持しようという戦術が顕著にうかがえる。

【表 45 国籍】

	1成	1子	2世	3世
日本	21	12	2	1
ボリビア	0	0	3	0
二重国籍	0	0	45	6
その他	0	0	2*	1**
合計	21	12	52	8

*2名ともアルゼンチン国籍。

**ブラジルを含む三重国籍。

【表 46 職業】

	1成	1子	2世	3世
専業・兼業農家	15	9	43	7
賃金労働	0	1	4	1
その他*	2	1	3	0
無回答**	4	1	2	0
合計	21	12	52	8

*日本での出稼ぎを主な収入源とする場合を含む。

**「退職した」とのみ記した回答を含む。

職業については、表 46 に示したように、世代を問わず、専業農家・兼業農家が中心となっている。

5.2. 言語使用についての意識

オキナワ移住地における言語使用についての意識を、ビラ・カロン地区の記述と同様に、2 世を中心に述べていく。なお、オキナワ移住地では、沖縄本島北部出身者も多いことから、一口に「方言」とは言っても、それが沖縄の地域共通語である那覇方言であるかは定かでなく、北部方言と中南部方言の接触方言である可能性も十分に考えられるが、今回はあくまでも「沖

縄方言」と意識されているものとして一括している。

5.2.1. 家族内の場合

家族内での言語使用意識を、表 47～表 50 に示す。オキナワ移住地の全体的な傾向として、「日本語現地語半々」を中心とした分布が見られる点が挙げられる。話し相手にもよるが、日本語や沖縄方言を用いるとする回答の割合が、ビラ・カロン地区の場合に比べて高くなることも特徴的である。

【表 47 家族全員揃った時の言語】

まず、表 47 から、家族全員が揃った時には、2 世は主に「日本語現地語半々」（有効回答の 42%）もしくは「主に日本語」（同 28%）で話すことがわかる。データ数は少ないが、この傾向は 3 世も同様である。

	1成	1子	2世	3世
主に方言	4	0	1	0
方言日本語半々	5	0	2	0
主に日本語	4	4	12	2
日本語現地語半々	0	3	18	4
主に現地語	0	1	3	0
三言語併用	5	1	5	1
方言現地語半々	0	0	0	0
その他(複数回答等)	0	1	2	0
無回答	3	2	9	1
合計	21	12	52	8

1 世成人移民では、「主に方言」「方言日本語半々」「主に日本語」を中心に回答が分布しているが、1 世子ども移民（準 1 世）になると沖縄方言を交えた回答は「三言語併用」の 1 名に限られ、「主に日本語」「日本語現地語半々」を中心とした使用状況へと変わる。2 世の示す特徴は、1 世子ども（準 1 世）の世代から見られる。

次に話し相手別の結果を表 48～表 50 に示す。ここから 2 世について次のことがわかる。

- ・同世代である兄弟に話しかける場合には、「日本語現地語半々」が 53%を占め、「主に日本語」が 18%、「主に現地語」が 16%でそれに次ぐ。同じく同世代である配偶者が相手の場合、「日本語現地語半々」が 39%に下がり、「主に現地語」が 26%に上がる。
- ・子どもに話しかける場合、やはり「日本語現地語半々」が約半数を占める（48%）。
- ・親に対しては、「主に日本語」が約半数を占め（対父親 56%、対母親 53%）、「方言日本語半々」がそれに次ぐ（対父親 22%、対母親 21%）。

オキナワ移住地の 2 世の場合、同世代以下の家族に対しては「日本語現地語半々」を中心に、日本語とスペイン語の二言語を使用していることがわかる。しかし、親に対しては「主に日本語」を中心とした使用状況となる。「方言日本語半々」が 20%程度を占めることから、2 世においても沖縄方言がまだ使用されていると言える。

世代を通して見てみると（表 48 参照）、1 世成人では、配偶者と話す時、「方言日本語半々」または「主に方言」に回答が集中しているが、1 世子ども（準 1 世）では、現地語を交えたものも含め回答が分散している。「日本語現地語半々」が中心となってくる 2 世への過渡期的段階のようである。

【表 48 同世代と話す時の言語】

	対配偶者						対兄弟			
	話しかける			話しかけられる			話しかける		話しかけられる	
	1成	1子	2世	1成	1子	2世	2世	3世	2世	3世
主に方言	6	2	0	8	3	0	0	0	0	0
方言日語半々	9	1	0	6	1	0	0	0	0	0
主に日本語	1	1	6	2	2	7	7	1	8	2
日語現地語半々	1	1	15	0	1	16	20	5	18	4
主に現地語	0	1	10	0	1	9	6	0	6	0
三言語併用	0	3	7	0	1	6	5	0	5	0
方言現地語半々	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
無回答	4	3	14	5	3	14	14	2	15	2
合計	21	12	52	21	12	52	52	8	52	8

【表 49 親と話す時の言語】

	対父親				対母親			
	話しかける		話しかけられる		話しかける		話しかけられる	
	2世	3世	2世	3世	2世	3世	2世	3世
主に方言	0	0	1	0	0	0	2	0
方言日語半々	7	0	7	0	9	0	10	0
主に日本語	18	3	19	4	23	3	21	3
日語現地語半々	3	5	1	3	7	5	7	5
主に現地語	1	0	1	0	1	0	0	0
三言語併用	3	0	3	1	3	0	3	0
方言現地語半々	0	0	0	0	0	0	0	0
無回答	20	0	20	0	9	0	9	0
合計	52	8	52	8	52	8	52	8

【表 50 子どもと話す時の言語】

	話しかける			話しかけられる		
	1成	1子	2世	1成	1子	2世
主に方言	2	0	0	1	0	0
方言日語半々	6	0	0	7	1	0
主に日本語	9	3	9	9	4	13
日語現地語半々	2	8	19	2	5	16
主に現地語	0	0	8	0	1	7
三言語併用	1	1	4	1	0	4
方言現地語半々	0	0	0	0	0	0
無回答	1	0	12	1	0	12
合計	21	12	52	21	12	52

子どもと話す場合には、もう少し変化が早く進んでいる。1世成人では「主に日本語」と「方言日本語半々」を中心とした分布状況であるが、1世子ども（準1世）では「話しかける」際に「日本語現地語半々」が中心となり、2世と同様の傾向を示している。

データとしては少ないが、3世になると、2世とは異なり、親と話す時にも自身が沖縄方言を使うことはなくなる。回答は「日本語現地語半々」「主に日本語」に収斂され、沖縄方言が保持されているのは2世までと考えられる。

このように、オキナワ移住地では、家族同士の会話においては「日本語現地語半々」が主流であるが、沖縄方言の使用も2世まで見られる。ビラ・カロン地区と違って、2世まで沖縄方言・日本語が保持されていると言える。

5.2.2. 日系団体及び友人の場合

オキナワ移住地では、現地の日系の集まりへの参加率が高い（表51）。2世では「参加する」が90%を占める。（オキナワ移住地では、ビラ・カロン地区とは違って、日系・沖縄系団体への二重帰属はなく、基本的に全世帯が日系＝沖縄系団体に所属する。）友人については73%が「主に日系人」と答えている（表52）。

【表 51 日系の集まりへの参加の有無】

	1成	1子	2世	3世
参加する	12	11	46	7
参加しない	6	1	5	0
無回答	3	0	1	1
合計	21	12	52	8

【表 52 日系人の友人の有無】

	1成	1子	2世	3世
主に日系人	20	8	38	5
半々	1	4	9	1
主に非日系人	0	0	4	2
友達いない	0	0	1	0
合計	21	12	52	8

日系団体の集まりと友人との会話における言語使用意識を表53にまとめて示す。（「対本土系の友人」に関しては、相手が沖縄ではなく本土出身者であることを考慮し、当地での調査の際には、方言を含む選択肢（斜線を施してある部分）を設けなかった。）

ここから、2世について次のことが確認できる。

- ・日系団体の集まりにおいても、「日本語現地語半々」が有効回答の57%を占め、これを中心に「主に日本語」「主に現地語」にそれぞれ約20%ずつ回答が分布している。
- ・沖縄系の友人と話す時でも63%が「日本語現地語半々」と答え、10%の「三言語併用」を除けば方言は用いられない。
- ・本土系の友人相手の場合には、「日本語現地語半々」が40%で最多、次いで「主に日本語」が32%、「主に現地語」が26%という結果である。

世代ごとに見ると、日系団体の集まりの場合には、1世成人では方言を交えた言語使用中心

であるのが、1 世子ども（準 1 世）では日本語中心に、2 世では日本語と現地語を交えて話す、というように変化している。

沖縄系の友人と話す場合、1 世成人では日本語と方言を中心に使用しているが、1 世子ども（準 1 世）では「三言語併用」が最多となり、現地語を交えるようになる。2 世以下では日本語と現地語を中心とした使用となり、方言は使われなくなることがうかがえる。

「本土系の友人」に関しては、1 世成人・1 世子ども（準 1 世）ではともに「主に日本語」を用い、2 世以下ではスペイン語を使う比率が高まっている。

【表 53 日系団体の集まり及び友人との会話における使用言語】

	地域日系の集まり				対沖縄系の友人				対本土系の友人			
	1成	1子	2世	3世	1成	1子	2世	3世	1成	1子	2世	3世
主に方言	3	1	0	0	7	1	0	0				
方言日語半々	6	1	0	0	12	2	0	0				
主に日本語	2	5	9	1	1	0	4	3	19	10	16	4
日語現地語半々	0	0	25	5	0	1	32	5	0	0	20	4
主に現地語	0	1	8	0	0	1	9	0	0	2	13	0
三言語併用	0	2	1	1	1	4	5	0				
方言現地語半々	0	0	0	0	0	0	0	0				
その他(複数回答等)	0	0	1	1	0	1	1	0	0	0	1	0
無回答	10	2	8	0	0	2	1	0	2	0	2	0
合計	21	12	52	8	21	12	52	8	21	12	52	8

5.2.3. 仕事の場合

沖縄方言、日本語、スペイン語の三言語について、仕事上使うか否かを尋ねた結果を表 54 に示す。沖縄方言については 2 世では有効回答の 86%が「使わない」と答えたのに対し、スペイン語については 94%が「使う」と答えている。日本語については「使う」が「使わない」を若干上回っており、ビラ・カロン地区に比べて、日本語を使用することが多い。

【表 54 仕事上の各言語の使用状況】

	方言				日本語				スペイン語			
	1成	1子	2世	3世	1成	1子	2世	3世	1成	1子	2世	3世
使う	6	3	4	0	6	6	17	1	6	7	33	2
使わない	0	3	25	2	1	1	15	1	1	0	2	0
無回答	15	6	23	6	14	5	20	6	14	5	17	6
合計	21	12	52	8	21	12	52	8	21	12	52	8

世代を通して見ると、沖縄方言については、1 世成人では有効回答のすべてが「使う」となっているが、1 世子ども（準 1 世）ではこれが「使わない」と同数となり、2 世では「使わない」が主流となる。

日本語については、有効回答のみを見ると、1 世成人と 1 世子ども（準 1 世）では「使う」

が優勢の結果となっている。しかし、2世では「使う」と「使わない」が17対15とほぼ拮抗しており、日本語の使用率が低くなってきていることがうかがえる。

これに対しスペイン語の場合は、1世成人・1世子ども（準1世）の世代から一貫して「使う」という回答が主である。

5.3. 言語能力についての意識

表55は、さまざまな場面における、方言、日本語、スペイン語の能力に対する意識を、「聞ける」「話せる」「読める」「書ける」の技能別に尋ねた結果を集計したものである¹⁰⁾。

まず、沖縄方言について見ると、オキナワ移住地においても、世代が下がるほど言語能力の自己評価は低くなっているが、技能別、場面別に見ると、まだ保持されている部分が見られる。特に、「聞ける」の場合、2世でも「よく」または「だいたい」できるという回答に集中している。「話せる」でも、「家庭での話」や「あいさつ」といった場面では、「まったく」できないと回答する人は減る。

日本語に関する2世の意識を見ると、「聞ける」「話せる」では、場面による差は見られるものの、「よく」または「だいたい」できると回答されている。「読める」「書ける」では、「まったく」できないとの回答も増加してくるが、多くは「よく」「だいたい」「少し」できると回答している。オキナワ移住地の場合、全世代を通して日本語に関する自己評価は高い。

スペイン語については、オキナワ移住地でも、世代が下がるほど、「よく」できると回答する人が多くなっており、2世では、四技能ともすべての場面において、「よく」できるとの回答がもっとも多くなっている。ただし、四技能全般において「よく」できると回答しているのは2世以下であり、1世成人、1世子ども（準1世）の場合、自己評価は技能、場面ごとにさまざまである。また、2世以下において、「よく」できるとの回答がもっとも多い場合でも、場面によっては「だいたい」できるという回答が占める率も高く、回答が「よく」できるのみに集中しているわけではない。スペイン語については、全体的にばらつきが見られる。

上記の点と関わる使用言語別のテレビ・ビデオと新聞の利用頻度を尋ねた結果を取り上げると、表56、57に示すようになっている¹¹⁾。

ここから、2世については次のことが確認できる。

- ・日本のビデオは、「よく」あるいは「ときどき」見るとする回答が合計で74%となる。現地のテレビ番組については96%が「よく」または「ときどき」見るとしている。
- ・日本語の新聞については、「ほとんど」あるいは「まったく」読まないという回答が88%を占め、90%が「よく」ないし「ときどき」読むという現地語の新聞とは反対の分布を示している。

【表 55 言語能力についての意識】

[illegible]

【表 56 テレビ・ビデオを見る頻度】

	日本のビデオ				NHK				現地のテレビ番組			
	1成	1子	2世	3世	1成	1子	2世	3世	1成	1子	2世	3世
よく	5	4	22	4	20	11	23	2	4	7	42	5
ときどき	7	4	17	4	0	0	20	4	7	4	8	2
ほとんど(ない)	4	3	10	0	0	1	7	2	5	0	1	1
まったく(ない)	4	1	3	0	0	0	2	0	5	1	1	0
無回答	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
合計	21	12	52	8	21	12	52	8	21	12	52	8

【表 57 新聞を読む頻度】

	日本語の新聞				スペイン語の新聞			
	1成	1子	2世	3世	1成	1子	2世	3世
よく	2	0	0	0	0	5	32	3
ときどき	3	2	4	0	2	5	15	3
ほとんど(ない)	1	1	3	0	2	1	3	2
まったく(ない)	13	9	42	8	16	1	2	0
その他(注つき等)	1	0	2	0	1	0	0	0
無回答	1	0	1	0	0	0	0	0
合計	21	12	52	8	21	12	52	8

この傾向は、比率の違いはあるが、3世にもほぼ同様に見られ、先に見た日本語能力とスペイン語能力についての意識の違いとしても表れていると言えよう。その一方で、ビラ・カロン地区と比較して日本語の能力意識が高いことも、日本のビデオの視聴頻度の相対的な高さに関連していると考えられる。

2世に見られる上記の傾向は、1世子ども（準1世）の世代から確認できるものである。1世成人については、日本語のメディアの利用状況は他の世代とほぼ同様であるが、現地語のメディアに関しては、テレビの場合「よく」または「ときどき」見るという回答と、「ほとんど」または「まったく」見ないという回答がほぼ均衡しており、他の世代ほど視聴頻度が高くない。現地語の新聞に至っては、「まったく」読まないという回答が80%を占めており、「よく」または「ときどき」読むという回答が83%を占める1世子ども（準1世）とは大きく異なっている。1世成人に見られた、スペイン語の能力が低いという意識は、このメディアの利用状況とも関連していると考えられる。

その一方で、1世成人では、日本語の新聞については「まったく」読まないとの回答が主であるが、日本語を書く能力についての評価は高い。これは言語形成期を日本で過ごしてきたためであろう。1世子ども移民との背景の違いが、言語能力意識にも反映されている。

6. まとめと今後の課題

以上をまとめて示すと、次の図表ようになる。

【ブラジル・都市沖縄系エスニックコミュニティ】

1 世成人 →→ 1 世子ども (準 2 世) →→ 2 世 →→ 3 世				
日本国籍 商業		日本国籍 商業		ブラジル国籍 商業・事務職・技術職 高学歴・ブラジル公教育重視
日本語	○	○	×	×
沖縄方言	○	△	×	×
ポルトガル語	△	○	○	○

【ボリビア・農村沖縄系エスニックコミュニティ】

1 世成人 →→ 1 世子ども (準 1 世) →→ 2 世 →→ 3 世				
日本国籍 農業		日本国籍 農業		日本・ボリビア二重国籍 農業 ボリビア人と隔離した二元的教育
日本語	○	○	○	○
沖縄方言	○	△	△	×
スペイン語	△	○	○	○

戦後、いずれも永住を目的とした移動を行ったビラ・カロン地区とオキナワ移住地の 1 世成人移民においては、言語使用及び能力についての意識がほとんど変わらないにもかかわらず、ビラ・カロン地区では、2 世におけるモノリンガル化が進み、オキナワ移住地では、3 世においても日本語が保持されている。この違いは、子ども世代である 2 世に対して、「ブラジル国籍を取得させ、ブラジルの公教育を重視し、高学歴化に基づくブラジル人としての社会的成功をめざす」か、「日本国籍を取得させ、ボリビア人と隔離した日ボ校において排他的二元的教育をおこない、二重国籍という生活戦術による経済的成功（ボリビア人を雇用した大規模農業と日本への長期研修）をめざす」かの違いと相関している。

移民の言語シフトは三代目で完成すると言われることが多いが、どちらのコミュニティにおいても、それとは異なる様相を呈している。ビラ・カロン地区では 2 世段階でほぼモノリンガル化しており、オキナワ移住地では 3 世であってもなお日本語が保持されているのである。こ

これは、子どもをブラジル人として育てたビラ・カロン地区では、1世成人移民の親と子ども（2世）との会話において、主としてポルトガル語が使用されるのに対し、子どもに日本への帰属意識をもたせて二重国籍としたオキナワ移住地では主として日本語が使用されているということにも表れている。併せて、オキナワ移住地ではボリビア人を雇った大規模農業を営むことから、スペイン語の威信が低いということも関係しているであろう。

言語が接触するのではなく、言語を話す人々が接触する。従って、人々がどのような社会的、経済的、政治的状況のなかで接触しているかを考える必要があるのだが、本稿ではその一端を考察したにすぎない。今後、言語生活調査の際、自由記述式で回答を求めた、沖縄方言や日本語教育についての意見、訪日（デカセギ）経験や言語意識等の項目の分析をさらに進めることにより、総合的な考察をめざしていきたい。

付記

本調査研究は、大阪大学 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」及び大阪大学グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文科学国際研究拠点」の一環である。移住地の方々に多大なるご協力を賜った。記して謝意を表する。

執筆は、工藤・森を統括とし、以下のように分担して行った：白岩（3.2の表、4.1、5.1）、森田（2.3、3節本文）、齊藤（3.3の表、4.2、5.2）、朴（3.4の表、4.3、5.3）。

注

- 1) 以下、表中ではビラ・カロン地区を「カロン」、オキナワ移住地を「オキ移」、1世成人移民を「1成」、1世子ども移民を「1子」と略して表記する。「成人移民」「子ども移民」については2.2.3を参照。
- 2) ビラ・カロン地区は2005年7月26日～28日、オキナワ移住地は2007年8月23日～26日の談話録音調査の際に補充及び追加調査をおこなった。
- 3) 15歳未満の会員、移住地外へ転居した会員、日本でデカセギ・研修中の会員、日系人との婚姻により加入したボリビア人配偶者などは対象者から除外した。
- 4) 両親の世代が異なる場合、子どもの世代は若い世代の親と等しいものとする。たとえば、1世と2世の間に生まれた子どもは2世となる。
- 5) 表5では、オキナワ移住地の1920年代～1940年代生まれの1世成人の対象者は22名だが、この中に1940年代生まれではあるものの、計画移民終了後の1979年に個人で渡航した対象者が1名含まれている。この対象者を除外したため、ここでは21名となっている。
- 6) 複数回答（「1、2」、「1、3」）が2例見られたが、「その他」として集計した。
- 7) 家族内での言語使用意識を示していくが、該当する家族成員の有無によって無回答の数が増減する場合がある。各世代全体の過半数を無回答が占める場合には、本稿では数値の掲載を割愛している。
- 8) ビラ・カロン地区に卓越してきた自営業型戦術によって選択された職種は、ブラジル人市場に対して、非日本的な財を販売ないし生産するという共通の特徴をもっていた。このことが仕事の場合の言語使用のあり方に影

響した可能性が高いと現時点では解釈できる。

- 9) 複数回答（「1、2」）が1例見られたが、「その他」として集計した。
- 10) 複数回答や、「使わない」「機会がない」等といった回答がいくつか見られたため、それらは「その他」として集計している。
- 11) 任意参加であるピラ・カロン地区とは異なり、オキナワ移住地では、基本的に全世帯が日系団体に所属する。このことによって、日ボ協会が統括するNHK海外放送が全世帯で視聴可能となり、移住地のイベントや通知がこのNHK海外放送を使って伝達されることもあって、ほぼ全世帯がNHKを視聴することに繋がっている。

主要参考文献

- 工藤真由美・白岩広行(2010)「ボリビア・オキナワ系移民社会における日本語の実態」『日本語学』29-6 明治書院。
- 工藤真由美・森幸一・山東功・李吉鎔・中東靖恵(2009)『ブラジル日系・沖縄系移民社会における言語接触』ひつじ書房。
- コロニア・オキナワ入植五〇周年記念誌編集委員会編(2005)『コロニア・オキナワ入植五〇周年記念誌 ボリビアの大地に生きる沖縄移民』オキナワ日本ボリビア協会。
- 在ブラジル小禄田原字人会編(1997)『小禄田原字人移民80周年記念誌』サンパウロ。
- 白岩広行・森田耕平・王子田笑子・工藤真由美(2010)「ボリビアのオキナワ移住地における言語接触」『阪大日本語研究』22 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座。
- 東北大学文学部心理学研究室編(2000)『南米ボリビアのオキナワ移住地出身者の日本適応に関する社会心理学的研究』東北大学文学部心理学研究室(科学研究費補助金「南米ボリビアのオキナワ移住地出身者の日本適応に関する社会心理学的研究」成果報告書)。
- ブラジル沖縄県人会編(2000)『ブラジル沖縄県人移民史―笠戸丸から90年―』サンパウロ州印刷局。
- ボリビア日本人100周年誌編集委員会編(2000)『ボリビアに生きる 日本人移住100周年誌』ボリビア日系協会連合会。
- 森幸一(1998)「戦後における沖縄系移民のエスニック職業としてのクストゥーラ(縫製業)―ミドルマン・マイノリティへの道―」サンパウロ人文科学研究所編『人文研』No.1. サンパウロ, サンパウロ人文科学研究所発行。
- 森幸一(近刊)「沖縄系都市エスニックコミュニティの成立と展開過程の経済的側面―自営業戦術の累積的連鎖を視点として―」準備中。
- 森幸一・大橋英寿(1996)「日系人移住地への現地労働者の流入と定着―ボリビアのオキナワ移住地の事例―」『東北文化研究室紀要』37 東北大学文学部日本文化研究所。

白岩 広行 (博士後期課程学生)
 森田 耕平 (博士前期課程学生)
 齊藤 美穂 (文学研究科助教)
 朴 秀娟 (博士後期課程学生)
 森 幸一 (サンパウロ大学教授)
 工藤 真由美 (文学研究科教授)